
 学 会 記 事

第38回新潟化学療法研究会

日 時 平成11年6月19日(土)
PM 4:00~
会 場 新潟東映ホテル 1F
白鳥の間

I. 一般演題

1) 抗菌薬のアレルゲン性の検討

八木 元広 (水原郷病院 薬剤科)

【目的】抗菌薬のアレルギー性副作用は発現頻度が高く、化学療法に大きな障害となっている。そこで経口抗菌薬のアレルゲン性を臨床および基礎の両面から比較検討した。

【方法】臨床では、当院の過去(H3.1~H8.12)の全経口抗菌薬服用患者19,944例を対象に、アレルゲン性(=白血球遊走阻止試験陽性例数/抗菌剤服用例数)を検討し、基礎ではモルモットを用い化学物質の接触感作性を評価するのに有用な Maximization test (MT)を行った。

【結果】経口抗菌薬のアレルゲン性は、全体で0.271% (54/19944)で、薬剤分類別ではβ-ラクタム系薬剤が0.240%で、そのうちペニシリン系薬剤が0.486%、セフェム系薬剤が0.171%で、キノロン系薬剤0.043%、マクロライド系薬剤0.136%、テトラサイクリン系薬剤0.418%、その他の抗菌薬1.408%であった。抗菌薬間の比較では、β-ラクタム系薬剤、またその内セフェム系がキノロン系薬剤に比べ有意に高いアレルギー発現率を示した。また、β-ラクタム系薬剤の中のペニシリン系がマクロライド系薬剤に比べ有意に高い発現率を示した。

また、MTではβ-ラクタム系薬剤が陽性を示したのに対し、キノロン系薬剤は1/4例にしか陽性を示さず、皮膚反応の平均スコアもβ-ラクタム系薬剤が20.8に対しキノロン系薬剤は3.2であり、β-ラクタム系薬剤に比べキノロン系薬剤が有意に低いアレルゲン性を示した。

【結論】以上臨床および基礎的検討から、キノロン系薬剤はβ-ラクタム系薬剤に比べ細胞性免疫関与のアレルゲン性が低いと考えられる。

2) アルベカシン血中濃度解析の応用

継田 雅美 (新潟市民病院 薬剤部)
吉川 博子 (同 内科)

アルベカシンの血中濃度測定・解析を行なった症例から、その意義と問題点を考察した。

解析の目標血中濃度はピーク値7μg/ml以上12μg/ml以下、トラフ値2μg/ml以下とし、2点採血の測定後日本人母集団パラメータを用い、2-コンパートメントモデルで解析を行なった。症例の評価については、効果はCRP・白血球数・菌の減少から、副作用は血清クレアチニン値などから判断した。解析は7症例に行われた。解析によりトラフ値をおさえながらピーク値を十分にあげることができたため副作用なく効果がみられた症例があり、血中濃度測定・解析は有用であると思われる。しかし、前回の測定値からは予測できない血中濃度が測定された例があった。アミノグリコシド系薬剤の血中濃度は特に病態や併用薬剤、点滴時間や採血時間の違いに影響されるため、測定値の判断には注意が必要である。

3) *Candida albicans* 分離株の性状に関する検討

二宮 一智・又賀 泉 (日本歯科大学 新潟歯学部口腔 外科学第二講座)
青木 茂治 (同 総合研究センター R1施設)

C. albicans は健康者の口腔からは約30%の頻度で分離され、口腔常在菌の一種と考えられており、通常は病原性を発揮することはない。しかし、宿主の感染に対する抵抗性がなんらかの原因で低下すると口腔内粘膜に感染を起し口腔カンジダ症を発症させる。したがって本真菌は口腔領域の日和見感染起因菌として、きわめて重視されている。

口腔カンジダ症の主な起因菌とされる *C. albicans* をさらに細かい細胞生物学的性状で生物型 (biotype) の差で鑑別できれば、カンジダ感染の疫学的解析が可能